

| | |
|--------------|---|
| Title | Diseases of Civilization in Henry James |
| Author(s) | 高橋, 信隆 |
| Citation | 大阪大学, 2008, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/49099 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。 |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

| | |
|------------|--|
| 氏名 | 高橋 信隆 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 第 21690 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 20 年 3 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻 |
| 学位論文名 | Diseases of Civilization in Henry James (ヘンリー・ジェームズにおける文明の病) |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 玉井 暲 (副査) 教授 森岡 裕一 准教授 服部 典之 准教授 片渕 悦久 准教授 石割 隆喜 |

論文内容の要旨

本論文は 19 世紀末アメリカの小説家ヘンリー・ジェームズの描く人物像が、世紀末という風土の中で社会の動向に不安を抱いた結果、偏執的な欲望に衝き動かされる存在であると位置づけ、文明の病という視点から彼らの生態を探り、その異端性を明らかにせんとするものである。論文は序章、本論 11 章、及び結論から構成されており、全体で英文 225 頁、和文 400 字詰め原稿用紙に換算しておよそ 500 枚の論文である。

第 1 章では、ジェームズ作品——特に、『ねじの回転』(1898)——に見られる毒の修辞学を論じる。衛生思想に取りつかれたヴィクトリア朝のイギリスを舞台とするこの作品の家庭教師は、毒のイメージに取りつかれており、赴任先の館に現れる悪霊を毒のイメージに基づいて描写する。道徳的清潔さに過度の重点を置く彼女にとって、悪霊のような道徳的に汚れた存在は、毒のイメージを与えられるのにふさわしい。

同様に、以下の数章では、19 世紀末の社会不安を反映した人々の反応をいくつかの特徴的な側面から分析し、同時に、新視点からの作品論を展開する。まず第 2 章では、短編や『大使たち』(1903)、『鳩の翼』(1902)における、繊細な感受性を持った人物たちの抱く、群衆に満ちた都市に対する計り知れない嫌悪感を、続いて第 3 章では、『アメリカ人』(1877)の中に、当時流行していた観相学に対する皮肉な見解を、また、第 4 章では、『アメリカ的情景』(1907)を材料に、ユダヤ人や黒人のような社会的弱者が幽霊として表象されるさまを読み解く。

第 5 章は、『黄金の杯』(1904)を考察する。なぜ、この作品では、イギリス人以外の西洋人が退廃的なのか。アメリカの大富豪の娘と結婚するイタリア人公爵はローマ教皇の悪徳の血を受け継いでおり、また、夫と不倫関係に陥いる女性が獣のように見え、妻を抑圧する父はサディストのように見える。他方、イギリス人大佐は、ひとり世紀転換期の西洋を不安に陥れた精神的退廃から免れている。イギリス人は、自国も退廃の波に覆われるのではないかという不安を抱いていたが、その不安を他者としての外国——アメリカやイタリア——に投影することにより払拭し、自分たちだけは道徳的に清潔であると思込もうとしている。『黄金の杯』の人物描写は、そのような世紀転換期の不安を表象するものである。

第 6 章以降の後半部では、科学技術の進歩とそれをもたらした物質主義の弊害という視点から作品論が展開されている。まず第 6 章では、情報化社会の到来と、それに翻弄される人物群像という視点から『大使たち』を分析し、第

7章では短編に見られる、主人公の視線が最新光学装置のそれと重なる点を指摘、第8章では、『鳩の翼』におけるファッションのメタファー性を考察する。続いて第9章では、『ある貴婦人の肖像』（1881）におけるメタファーとしてのアメリカ風景を、第10章では、『カサマシマ公爵夫人』（1886）における遊歩者の役割について議論する。

最終章の第11章では、『鳩の翼』における暗示の力を考察する。主人公は、ブロンツイーノによる貴婦人の肖像面を見つめるが、なぜ、この描写では、“suggestion”という言葉が用いられなければならないのか。この小説の新鮮さは、眼差し、言葉による暗示、そして建物といった誰もが日常的に経験できるものを、精神操作をするための装置に変えている点にあると、論者は主張する。

論文審査の結果の要旨

本論文はジェイムズの作品を幅広く、かつ、綿密に読みながら当時の時代思潮にも目を配り、主要作品の作品論、作家論はもちろん、文化研究をも射程に入れたスケールの大きな研究である。19世紀末に焦点を絞り、文明の病——強迫観念や不安、退廃——は、文明に対する人々の態度から発生するものであり、ジェイムズが描く人物たちは、肥大化した妄想に執着するあまり、妄想の世界に取り込まれるとする結論は、従来の「異常心理」研究を文化論から読みなおしており、ジェイムズ研究に新鮮な切り口を提供するものと思われる。

ただし、本論文において問題がないわけではない。章立てが多すぎて論点の展開が十分だとは言えない箇所が散見されるし、時代背景の説明と他の作品からの断片的引用が作品論のスムーズな展開を妨げている。また、「文明の病」「世紀末の不安」などの鍵となる概念規定が明瞭さを欠く点や、社会・文化の大きなコンテキストに広げようとすればするほど、登場人物の特殊事情がかえって浮き彫りになり、「社会不安の反映」の視点がかすんでしまう点は残念である。

しかし、それらの点は望蜀のごときのものであって、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。